

# すべての子どもたちの「登校支援」のために

—適切なアセスメントを通じたチーム支援を目指して—

教育相談センター指導主事研究会議

松田 典英      板橋美由紀      中島 智美      小清水 豊

## I 主題設定の理由

「かわさき教育プラン」では、「一人ひとりの将来の社会的自立に向け、必要な能力や態度を育てる教育」とである「キャリア在り方生き方教育」を学校教育の重点施策としている。さらに基本政策Ⅲには「一人ひとりの教育的ニーズに対応する」として、「発達障害の他、いじめや不登校、経済的に困難な家庭環境など、様々な教育的ニーズのある子ども」も含めて、「すべての子どもが生き生きと個性を發揮できるよう」適切な支援を実施するとしている。

また、平成28年7月に不登校に関する調査研究協力者会議は「不登校児童生徒への支援に関する最終報告（以下「最終報告」）」の中で、様々な対策がとられているにも関わらず、不登校児童生徒数は依然として高水準で推移しており、今後も不登校に関する取組のさらなる充実が図られる必要があると報告している。

この状況は川崎市も同様の傾向がみられており、平成27年10月に川崎市立学校全教員に配付した「一人ひとりの子どもを大切に作る学校をめざして〔Ⅷ〕～子どもたちの登校を支えるために～」にも示したように、すべての児童生徒が「学校に行くのが楽しい」と感じられるような「魅力的な学校づくり」をすると同時に、欠席が続いた子どもに対して適切かつ迅速に対応するといった支援を、さらに充実させる必要があると考える。

そして、教育相談センターとしては、「すべての子どもたちの登校を支援する」という観点で、これまでの取組や研究の成果、今後の具体的な支援をもう一度見直し、今後の対策について考えていく必要があると考え、研究主題及び副題を次のように設定した。

すべての子どもたちの「登校支援」のために  
—適切なアセスメントを通じたチーム支援を目指して—

## II 研究の内容

### 1 これまでの研究のまとめ ～「先行研究」のまとめ～

本研究は、平成26・27年度教育相談センター指導主事研究である「不登校等の問題行動の未然防止と初期対応のあり方—課題を見出し、解決策を探る—」を先行研究としてベースにしている。この先行研究の中で、支援の現状を把握するために様々な調査を行った。ここにこれまでの研究について簡単にまとめておく。

#### (1) 中学校不登校生徒の過去の欠席状況・学習状況の調査

市内中学校5校で、長期欠席に該当する生徒の過去の欠席状況と学習成績について調査を行った結果、中学校で長期欠席になった生徒が小学校6年生のときに7日以上欠席している割合が高かったり、中学校1年生で長期欠席になる生徒は学習に課題を抱える生徒が多いなど、ある一定の傾向があることが見られた。

## (2) 各年代の教員・スクールカウンセラー（以下SC）に対する聞き取り調査

初任者、2年目、10年目と各年代で、指導についてのアンケートを実施したところ、経験年数ごとに課題と感じていることに傾向があることが分かった。しかし同時に、「不登校児童生徒はどのような支援を必要としているかわからない」といったことが各年代で共通した課題として見えてきた。

## (3) 不登校対策研修会での研修

年2回行われた不登校対策研修会の中で、小中学校の教員が中学校区ごとに班を作り、具体的な子どもを思い浮かべながら、実際に小中で引継ぎを行うときに、どのような内容を引き継ぐことが効果的なのか、項目を選定し、引継ぎシートを作成しながら検討した。「中学校区の教員同士でグループになり、じっくりと話し合いができたことは、非常に効果的であった」という感想が多くあり、小中学校の円滑な引継ぎが大切だと感じた教員が多くいることが改めて確認された。

今後は、すべての子どもたちの「登校支援」のために、これまでの研究の成果を各校に広め、各学校での支援を後押しするためにも、「支援のポイント」を「わかりやすく伝えていく」ことが最も重要な課題であるということが明らかになった。

## 2 本年度の実施した主な内容

先行研究等での課題を受けて、支援のポイントを絞り、分かりやすく伝える方策を考えるために、本年度はさらに具体的な取組をおこなった。主だったものは次のとおりである。

### (1) 不登校対策研修会の実施

不登校対策についての支援のポイントを整理するため、2回の研修の内容を工夫した。

#### ①第1回（6月28日）

表1 必要な資料のアンケート

不登校対策への教員のニーズをさらに詳しく把握するため、これまで教育相談センターで作成してきた手引きやチェックリスト等を実際に使ってもらい、どのような資料が学校で必要とされているかを

保護者面談の手引き	16.0%
登校支援記録票（例）	8.4%
アセスメント用シート（例）	7.7%

調べた。結果、表1のような順で回答が多かった。また、記述式の回答には「保護者対応に困っている」「若手の先生方のためにマニュアル的なものが欲しい」「支援を記録するような実際に使える様式が欲しい」といったものが多かった。

中学校区に分かれた小中引継ぎの研修については「実際に昨年度の研修で作成したシートを利用して引継ぎを行い、効果的な引継ぎができた」「授業交流でその後の生徒の様子を把握できた」といった感想があり、昨年度の研修が一定の成果を上げていることが把握でき、小中で情報を共有し、チームとして支援することの大切さを改めて確認できた。

#### ②第2回（1月11日）

SCスーパーバイザーとスクールソーシャルワーカー（以下SSW）を迎え、本研究で作成したアセスメントシート（例）を実際に使って不登校についての事例検討研修を行った。途中、SC、SSWの立場からの見立てを伝え、それを踏まえて再度検討するという形をとった。参加者は、この研修で、さまざまな視点を持つことの大切さや関係機関と連携することの重要性を再確認することができたようで、「新たな視点が見えた」「支援の方向性が見えた」「日ごろの連携が重要」との感想が多くあった。シートについても「実際に使いたい」「小中の引継ぎにも使える」と一定の評価を得ることができた。

## (2) 不登校対策連携協議会と不登校経験者によるパネルディスカッション

ゆうゆう広場、学校巡回カウンセラー、家庭訪問相談員、学校教育指導課、SSW、精神保健福祉センター、児童相談所、区役所地域みまもり支援センター、発達相談支援センター、県警少年相談・保護センター、相談指導学級、そしてさらには行政や学校からだけでなく、認定NPO法人教育活動総合サポートセンターとNPO法人フリースペースたまりばの職員を加え、今年度も2回、不登校対策連携協議会を行った。「この会で顔つなぎができた」「グループ討議で各機関のことを深く知ることができた」など多くの感想が出たが、連携するためには、このような会を定期的に行き、問題が起こる前に情報交換し、スムーズに連携できるようにすることの大切さを改めて実感した。



図1 不登校対策連携協議会  
グループ討議の様子

また、この会でできたつながりを生かし、本年度は、保護者や児童生徒向けと教育活動サポーター等向けに、2度、不登校経験者のパネルディスカッションを行った。参加者からは、「自分たちだけが悩んでいるわけではないことが分かった」「明るい未来が見えてきた」「高校に行けるんだと初めて分かった」「子どものことをもっとよく考えて支援する必要があると感じた」など、目先のことではなく、児童生徒の将来のことを見据えて支援していくことが大切であることを再確認する等、適切なアセスメントにおけるポイントを再認識することができた。

## (3) 文部科学省の通知等から

「最終報告」「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」等、本年度、不登校に関する文部科学省からの文書が出された。それら文書の中には次のようなことが書かれており、これまでの本市の不登校対策に関わる取組を振り返り、支援の在り方を再考するために、これら文書を本研究の重要な指針として参考にした。

- ・児童生徒が不登校にならない、魅力ある学校づくりを目指すことが重要。
- ・不登校については、取り巻く環境によっては、どの児童生徒にも起こり得ることとして捉える必要がある。
- ・不登校とは、多様な要因・背景により、結果として不登校状態になっているということであり、その行為を「問題行動」と判断してはならない。
- ・不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある。
- ・不登校児童生徒に効果的な支援を行うためには、アセスメント（見立て）をしなければならない。その実態の把握が的確でなければ、そこから導き出される支援計画も不適切なものとなり、不登校児童生徒に合ったものにはならない。
- ・困難を抱える児童生徒には、「児童生徒理解・教育支援シート」を作成するなど、個々の児童生徒に合った支援計画を策定し、その児童生徒を支援する関係者により、組織的・計画的な支援を実施することが必要である。

#### (4) 適応指導教室「ゆうゆう広場」の関わりから

適切なアセスメントをするために、ゆうゆう広場に  
通級している児童生徒や教育相談員から今までに聞いた話をまとめた。ゆうゆう広場に通級している児童生徒は周りに気を遣い、自分ができていないという無力感や罪悪感を潜在的に抱えていることがある。その結果、応援してくれる先生や保護者にまで気を遣って無理をしているときがあることがうかがえた。また、保護者も子育てについて自信が持てず、「自分の子どもが迷惑をかけて先生に申し訳ない」といった思いから、図2のように、問題が深刻化し不安が募るもの

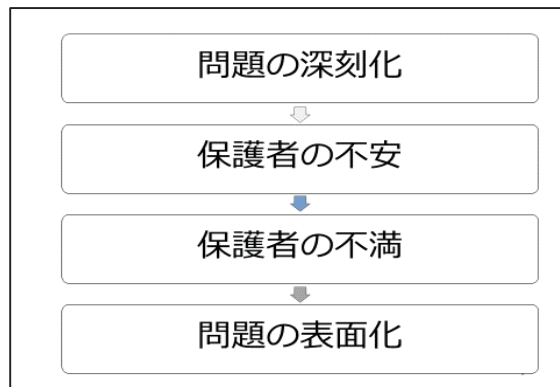


図2 問題が表面化するまでの流れの例

の、なかなかその不安を周りに伝えることができず、それが「私のことを分かってくれない」といった不満につながり、ようやく表面化してくるということもあることが分かった。そうならないためにも日ごろから保護者がすぐに相談できるような関係作りが大切である。そして、問題が表面化したときには、数々の取組と失敗と挫折が繰り返されており、すでに深刻化していることがあることを意識しておく必要があると感じた。

### 3 今後の対策について

通知等で何度も使われている「社会的自立」を将来の目標と考えると、児童生徒によってゴールは異なり、支援の方法についても本人の状況や本人と支援者との関係によっても異なることになると言える。しかし、本研究を通し、次に挙げる3点は児童生徒を支援する上で最も大切な部分であると考ええる。

#### (1) 未然防止（不登校になってからではなく、すべての子どもの登校を支援する）

ここまでの取組を含め、不登校対策に関わる中で、次のようなことが分かってきた。

- ・問題が表面化したときには、かなりその問題は進行している。
- ・欠席が長引くと復帰するのが難しくなる。
- ・不登校は一度経験してしまうと心に大きな傷を負う。その結果、小学校の経験を中学校で思い出し、不登校を繰り返す生徒がいる。
- ・不登校はその児童生徒だけではなく、かかわっている人間が複雑に絡み合っている状態なので、一度絡み合ってしまうと解きほぐすのが難しい。

つまり、不登校になってしまってから対応するのではなく、「すべての子どもたちの登校を支援する」という「未然防止」の姿勢が重要だということである。理由に関わらず、または理由が判明する前に、連続して休んだ場合には迅速な支援をする必要がある。実際に、本人に聞いても「体調不良」と言うだけで、本当の理由を言えなかったり、本人自身も自覚していなかったりする場合がある。教育相談センターでは、「この子は大丈夫だろう」という先入観にとらわれずに、1日目電話、2日目家庭訪問、3日目チーム支援会議という対応をする必要があると考えている。

## (2) 適切なアセスメント

支援をする上では適切なアセスメントが欠かせない。アセスメントとは一般的に「個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べたりすること」とされている。支援者側から見ると「わがまま」と感じてしまいがちなことでも実際には深い意味があったり、支援者の「かわいそう」という思いが、実は本人の思いと合っていないことがある。しかし、様々な関わりの中、多くの目で児童生徒をアセスメントしていくと新しく見えてくるものがあることが研究を通して分かった。アセスメントで重要なことは、「困った子ども」ではなく「困っている子ども」であるという視点を持ち、児童生徒本人の思いや困り感を的確にとらえ、これまで行われてきた支援とその成果を整理し、複数の目で確認し、支援につなげることである。また、支援をする中で児童生徒本人は成長し、周りの環境も変化していくため、継続的に繰り返しアセスメントをし直していく必要があることも忘れてはいけない。

## (3) チーム支援

担任、学年主任、児童支援コーディネーター、特別支援コーディネーター、児童生徒指導担当者、養護教諭、SC、管理職といった校内体制だけでなく、関係機関の専門家の意見を取り入れながらチームでアセスメントすることで、より適切なアセスメントにつながる。また、実際の支援についても、様々な立場で協力して支援することで、多面的で系統的な支援が実現すると考えられる。コーディネーター役を決めるなど、校内体制を整備し、日頃から関係機関と情報交換を密にすることで、良い関係を作っておき、支援者同士の支援も含めて迅速に対応できるようにしておくことが大切であるとする。

## 4 教育支援シート（アセスメントシート（例）・支援会議記録用紙（例））

ここまでの内容を受けて、適切なアセスメントを可能にするアセスメントシート（例）と、チーム支援を推進するためのポイントを分かりやすく示した、支援会議記録用紙（例）という二つのシートを提案したい。実際に各学校ごとで作成するための参考にするだけでなく、アセスメントやチーム支援会議において、どういったことに着目し、どう進めるべきかを確認するために利用してもらえるように工夫した。

### (1) アセスメントシート（例）について

このシートはどの場面で作成してもよいが、本研究では欠席が3日続いたら作成するという目安を設定した。

実際に、第2回不登校対策研修会で参加者にこのシートを使ってもらったところ、「支援のポイントが見えてきた」「できているところに注目できた」「文字として起こすと見えてくることもある」「すぐにでも使いたい」等の感想があり、アセスメントをする上で、大変有効であると考えられる。

記入にあたって

- ① あらかじめ担任や児童支援コーディネーター等が記入し、支援会議等の中で最近の情報をもとに、さらに修正したり、追記しながら作成していく。
- ② 欠席日数や本人の特徴的な様子など、ベースデータとなる部分があることを意識する。この部分は毎回あまり変わらないので、前回の内容をもとに作成することができ、また、引継ぎをするときの重要な情報にもなる。

- ③ 出欠席については経年経過を確認し、傾向をつかむために、小学校入学時より記入する。特に、保健室を含めた別室登校やゆうゆう広場などで出席扱いになっている日数は再掲することで把握する。小学校低学年の児童の場合は、就学前の状況を記入したり、またこの欄を月別にするのもよい。
- ④ 現段階でどのように関係機関と関わっているかを把握する。例えば、ゆうゆう広場に通っているとしても、頻度、時間、活動状況などわかる範囲で記入する。
- ⑤ 本人ができているところに着目をする。「何をさせるか」ではなく「現状で何ならできるか」を考えるための資料であることを意識する。
- ⑥ 本人の状況については、どこに課題があるかを把握するために「学習面」「生活面、体調面」「対人関係、情緒面」といったカテゴリーごとに記入し、どこに課題があってどこはできているかを把握する。
- ⑦ 本人を取り巻く環境も重要であるので、「学級」「家庭」「その他」の観点で記入する。その際、特に「家庭」に対しては、保護者も困っていることを意識し、「指導する」のではなく、「理解する」気持ちを大切にする。
- ⑧ 具体的な行動の記録は「直前」「その時」「直後」「どのような支援が効果的であったか」というように、支援を引き継ぐことを意識し、全員で共有できるようにする。

アセスメントシート (例)											No.	実施日時	
学年	学級	対象児童生徒氏名						性別				記入日	
学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	別室登校、出席扱い、遅刻、早退の様子等、休み始めの時期(月)、帰部(月曜日が多い等)			
出席日数													
別室登校(再掲)													
出席扱い(再掲)													
欠席日数													
遅刻													
早退													
●関係機関とのつながり(保護者や児童生徒が関わっている機関に○)													
ゆうゆう広場、教育活動総合サポートセンター、フリースペース等、活動指導教室、相談指導学校、こども文化センター、スポーツ少年団(セーラー、野球部)等、スクールソーシャルワーカー、県立・市立児童館、児童相談所、児童相談所、児童発達支援センター、発達相談支援センター、精神保健福祉センター、障害少年相談、児童センター、保健、フリースクール、地域の福祉施設、児童発達支援センター、フリースクール、サポートグループ、その他													
関わり方、様字等													
●本人の様子													
	学習面			生活面、体調面			対人関係、情緒面						
できていること、本人の強み													
気になること、本人の困り感													
特徴的なエピソード 状況 感じの行動 効果的であった支援													
●本人を取り巻く環境の様子													
家庭での環境			学級の雰囲気・学級との関係			その他の環境での状況							
※家庭環境(家庭での過ごし方)			※学級での雰囲気(本人の位置)			※生活環境の状況(国・事・地域資源等含む)							
●具体的な行動と支援の記録													
発生日	直前	その時	直後	事後	効果的であった支援								

図3 アセスメントシート (例)

シートの記入に際しては、不登校を問題行動として捉えるのではなく、社会的自立に向け、前向きに生活できるように支援することを意識する。児童生徒本人及び取り巻く環境の変化に伴い、追記、訂正したり、書き直したりしながら、支援を見直すことが必要となる。

## (2) 支援会議記録用紙 (例) について

このシートはチーム支援会議の記録用紙であり、1回の会議で1部作することを意図しているが、書き足したり、訂正したりして、支援の流れをわかるようにすることも考えられる。

記入にあたって

- ① チーム支援会議が単なる情報交換にならないように、アセスメントシート等を活用し、何のためにこの会議を行うのかを事前に確認する。そのことで短時間で効果的な支援につながるようにする。(授業の1時間程度(45分、50分)を目安)
- ② 大目標を設定する上では、本人や保護者の主訴や意向を大切にする。また、「不登校状態の改善」というようにあまり大きな目標にするのではなく、「朝、時間どおりに起きる」「放課後に担任と話をする」「友達の顔色をうかがいすぎずに話をする」等具体的な目標を立てる。

- ③ 支援については一つに絞るのではなく、いくつか考えて、新しい情報が入ったり、状況が代わったりしたときのために準備をしておく。
- ④ 小目標では目標をさらにスモールステップに分け、目標達成のために、いつ、どこで、誰が、何をするのかを具体的に決めていく。
- ⑤ スモールステップが終了するたびにチーム支援会議を行い、その都度、その段階での支援が適切か再確認する。
- ⑥ チームで意思統一を図り、担任等が学級経営に責任を感じて、一人で抱え込んでしまうことのないように、支援者同士が支え合うことをも意識する。

支援会議においては、「本人の育つ力を引き出す」という視点を大切に、支援者からやり方を指導する（押し付ける）のではなく、本人の社会的自立のために、本人のやり方で乗り越えることのために支援（育てる）することを意識する。また、児童生徒本人に過度な負担がかかると逆効果になることもあるため、教科担任制の中学校などでは、学習指導等を含めて、特に支援者同士がお互いの動きを調整する必要がある。

また、児童生徒本人だけでなく、本人を取り巻く環境への働きかけが支援にとって重要な場合も少なくないことを意識する。

関係機関からは、「もう少し早くつないでくれれば」という意見がある。方針が決まってからこうしてほしいとお願いするのではなく、ケースに関わりのある関係機関とは、支援会議の場には参加できない場合は、事前に相談し、アドバイスを受けるなど、専門家の意見を取り入れる工夫をすると良い。

シートの扱いについては、「このシートを作成されることでレッテルを張られるのではないか」「この情報が付きまるとして、子どもの将来に不利益になるのではないか」といった保護者の不安に配慮する必要がある。シートを作成することで児童生徒の成長を後押しすることができることを保護者と確認し、小中間や関係機関との引継ぎ等で使用する場合には、内容について保護者に承諾を得る必要がある。引き継いだ先でどういった支援が必要か、これまでの支援を振り返ることができる「まとめ用のアセスメントシート」を保護者と一緒に作成するなど、受け取る側が支援を引き継ぎやすいように工夫し、切れ目のない支援につなげていきたい。

### Ⅲ 研究のまとめ（成果と課題）

本研究は、文部科学省や国立教育政策研究所等からさまざまな提言や通知が出た時期に重なり、教育相談センターとして、今後、子どもたちの登校をどう支援していくかの指針を示すためには大変良い時期に行われた。本研究を通して、「未然防止、アセスメント、チーム支援」という視点が

学年		支援会議記録用紙（例）		No.	参加者
学年	学期	対象児童生徒氏名	記録者	実施日	
参加者（立場）					
●本人、保護者の意向（主訴を中心に）			保護者の意向		
本人の意向					
●見立てと支援					
課題			支援		
支援の方針（大目標・支援のポイント）					
↓					
小目標（誰に対して、誰が、何を行うのか、具体的に記入する）					
		本人について		環境・リソースについて	
【短期目標1】	月 日～ 月 日				
【短期目標2】	月 日～ 月 日				
【短期目標3】	月 日～ 月 日				

図4 支援会議記録用紙（例）

不登校への対応を考える上で大切なものであると同時に今後も研究していくべき課題であるということを変更して感じた。

「不登校状態になっていることは結果であり、その背景にあるものをしっかりとアセスメントして支援しなければ、課題の改善には至らない」ということを本研究の中で何度も聞いた。しかし、不登校の児童生徒を目の前にすれば、「すぐに学校に戻したい」と思うのも自然なことであろう。ただし、本人の思いを無視して学校に戻そうとすれば、傷口にただ蓋をただけになってしまい、たとえ一時的には学校に来られたとしても、再び「不登校」を繰り返えしてしまったり、状態を悪くしてしまったりする可能性もある。そうならないために、本人の思いを中心に考え、しっかりとアセスメントを行い、社会的自立を目指すという大きな目標に向け、そのために今できることは何かを考え、スモールステップの目標をもち、チームで支援していくことが大切である。そして、よりよい支援のためには具体的にどうすればいいか、今後も継続して考えていかなければならない。

今回提案した2つのシートは、これらの課題を次のステップへと進める一助となることを期待して作成したものである。これらのシートは、今後も検討を繰り返し、より良いものにしていく必要があるが、シートを作成し利用することが、児童生徒の支援につながると同時に、支援に対する視点を増やすことにつながっていくだろう。教育相談センターとしてこれらシートの利用に関して、今後も研究、研修を行い、よりよい支援につながるように努めていきたい。

不登校の未然防止のためには、すべての児童生徒にとって学校が魅力ある「心の居場所」である必要がある。たとえ学校には行くことができなかつたとしても、「心はつながっている」と児童生徒が思えるように、しっかりとアセスメントし、一人ひとりの内面に寄り添ってチームで支援していくことが大切であると考え。児童生徒の育つ力を信じ、自らの力で夢や希望をもってしっかりと歩んでいけるように、今後もよりよい支援に努めていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

- |   |       |
|---|-------|
| 齊藤万比古『不登校対応ガイドブック』中山書店                                    | 2007年 |
| 岡田守弘、芳川玲子、安藤嘉奈子、中島香澄、<br>『教師のための学校教育相談学』ナカニシヤ出版           | 2008年 |
| 春日井敏之、伊藤美奈子『よくわかる教育相談』ミネルヴァ書房                             | 2011年 |
| 諸富祥彦『図とイラストですぐわかる教師が使えるカウンセリングテクニック80』図書文化社               | 2014年 |
| 文部科学省「生徒指導提要」   | 2010年 |
| 川崎市教育委員会「一人ひとりの子どもを大切に作る学校を目指して [VIII] ～子どもたちの登校を支えるために～」 | 2016年 |

#### 【指導助言者】

東海大学教授（川崎市総合教育センター専門員）

芳川 玲子